

本高弓ノ木遺跡

発掘調査速報展

2011年3月29日(火)～5月29日(日)

財団法人鳥取県教育文化財団では、鳥取西道路の建設に先立ち、鳥取市本高にある本高弓ノ木遺跡の発掘調査を、平成21年4月から23年2月に行いました。この遺跡には、縄文時代の終わり頃～江戸時代に至る人々の暮らしのあとが残されていました。各時代にいろいろと重要な発見がありましたが、古墳時代前期(4世紀)に造られた水利施設から見つかった木製構造物や「土のう」積みは当時の土木技術の水準を示すものとして貴重です。



国内最古の「土のう」

古墳時代前期(約1600年前)の池状の落ち込み内に構築されていた木製構造物の調査中に、編物のようなものにくるまれた粘土が積み上げられている場所があることに気づきました。同じ大きさのものが整然と積み上げられており、現在の「土のう」積みという工法に類似しています。

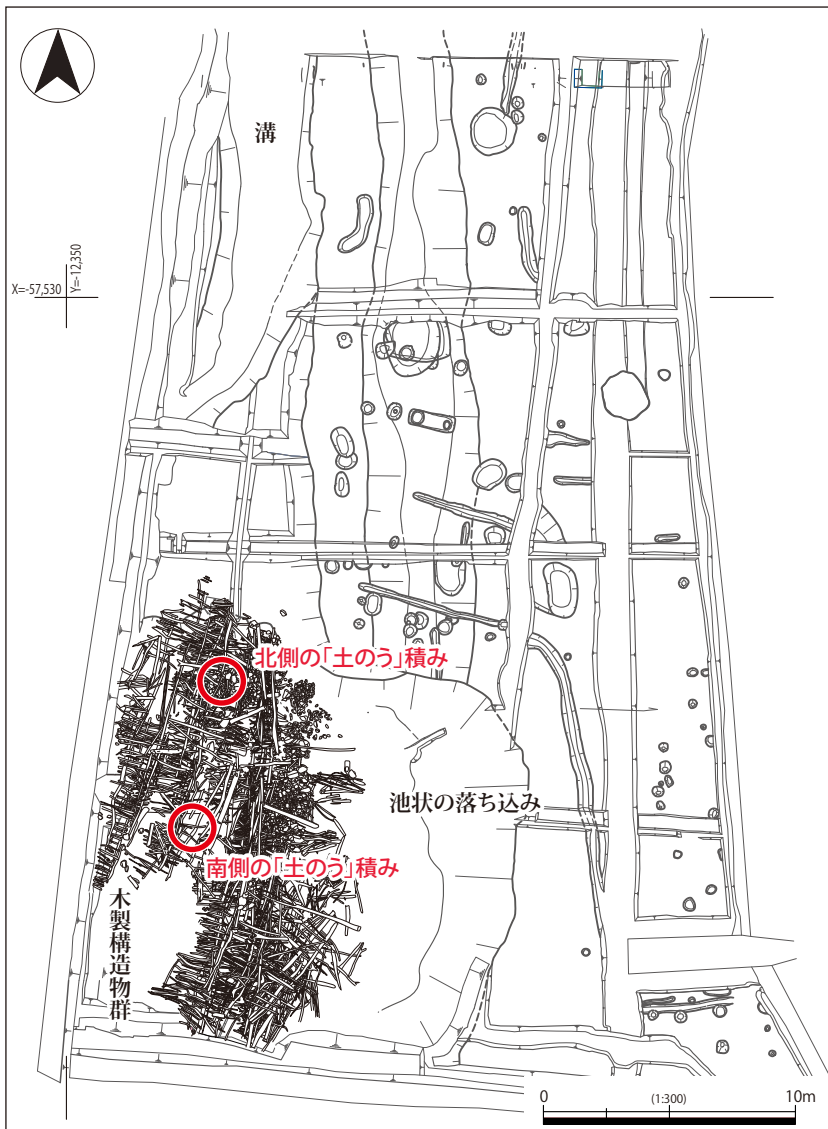
「土のう」は土や砂を詰める袋です。積み上げると土砂や水の移動を止めることができるため、工事現場や災害時の応急対策に用いられています。近代までは麻袋等が利用使われていましたが、現在はポリエチレン製が主流となっています。

本高弓ノ木遺跡から出土した「土のう」には、イネ科植物の茎とみられる植物の繊維が使用されていました。当時は袋ではなく、編物のようなもので粘土をくるみ、紐で縛っていたようです。そのため、出土した「土のう」は「藁巻き納豆」のような形をしています。



3世紀の終わり頃に築造された椿井大塚山古墳(京都府木津川市)では、石室の周囲に「土のう」らしい粘土の塊が積み上げられていた痕跡が確認されています。また、鳥取県内では7世紀頃に築造された晩田山28～30号墳に「土のう」積みと考えられる痕跡が見つかっています。

しかし、遺物として取り上げられた「土のう」は類例が少なく、本高弓ノ木遺跡の事例は、現存する国内最古の「土のう」です。



斜面を保護するように
積まれた「土のう」。
上部はさらに植物の繊維
で覆われています。



北側の「土のう」積み

「土のう」がほどけないよう
紐で縛られています。



南側の「土のう」積み
(最下部の土のう)



国内最古の「土のう」が積まれていたのは調査区南端にある池状の落ち込みの中です。
この落ち込みからは水利施設と考えられる木製構造物がみつかっています。

「土のう」積みは2ヶ所で発見されました。

北側の「土のう」積みは、落ち込み内の斜面を覆うように「土のう」が積み上げられていました。その上には植物の繊維がかぶせてあり、斜面の崩落や水の浸食を防ぐための工夫と考えられます。

一方、南側の「土のう」積みは、木製構造物の前面に「土のう」が平積みされていました。粘土を包んだ「土のう」で構造物の前面を締め固めていたのでしょう。「土のう」が様々な形で使用されていたことがわかります。

古墳時代前期の水利事業 - 池・溝・木製構造物 -



調査地南端の池状の落ち込みには、盛土や石積みがほどこされ、長い横木や杭を組み合わせた構造物が伴っています。

池状の落ち込みからは、幅が5m程もある溝(水路)が北に向かって伸びていました。溝の総延長は約200m、さらに調査区外に続いています。

おそらく周辺の河川から池状の落ち込みに引き入れた水の量や流れを木製構造物で調整し、北側の水路に出水していたと考えられます。

本高弓ノ木遺跡の北側の丘陵上には、山陰最古の前方後円墳・本高14号墳(全長63m)が4世紀に築造されています。本高弓ノ木遺跡に造られた水利施設は、こうした大型の古墳に眠る地元の権力者による地域開発の一端を示すものかもしれません。

